

異世界^をスキルブック^と 共に生きていく

Isekai wo SKILL BOOK to tomoni Ikiteiku

大森万丈

Banjou Omori

著

2

主な登場人物

ジャック

『黒の外套』の幹部。
かなりの切れ者。

佐藤健吾

本作の主人公。
元はサラリーマンだったが、
神様に『スキルブック』を
与えられて
異世界に転移した。

クリスティーナ

エスネアート王国の
第三王女。

エレナ

ケンゴの拠点を
取り仕切る少女。
ケンゴに心酔するあまり
時々極端な言動も……

リン

元気な虎獣人の少女。
『スキル強奪』の
能力を持つ。

マリア

『予知』のスキルを持つ
狼獣人の少女。

王都

日本で死んだしがないサラリーマンの俺——佐藤健吾が、神様の依頼でこの世界に来てからどれくらい経っただろうか？

まだ三カ月も経っていないはずだが、本当に色々なことがあった。たった一人でジャングルを探索し、魔物との戦闘や拠点の建造、それに食事の確保など、最初とはかく必死だった。

そんな中、俺を驚かせたのは“魔法”と“スキル”の存在だ。

俺は神様に貰ったユニークスキル『スキルブック』により、魔物や人の体内にある“魔石”からスキルポイントを獲得し、それと交換で様々なスキルを取得できる。

その種類は本当に多く、地球では考えられないような現象を、道具も使わずに簡単に起こせてしまう。

特に凄いのが『召喚』スキル。これは魔石からその所有者の生前の状態を復元し、俺の眷属にするというものだ。

このスキルのおかげで、今では安全な拠点を築き、魔物や人も含め、多くの仲間達に囲まれて生活している。

ただ、拠点があるフルネール大森林の中だけでは、物資の補給や生活を向上させるための技術の獲得は困難だ。

そこで俺は、人里を目指して大森林を抜けたのだが……どういわけか多くの厄介事に巻き込まれた。

最初に立ち寄った村は山賊に襲われていたし、街道でも馬車を襲う盗賊に出くわした。

しかもこの盗賊は「黒の外套」というかなり凶悪な組織らしく、アルカライムの町では知り合いが攫われて、危うく命を落とすところだったのである。

どうにか悪党どもを撃退できたから良かったものの、俺には神様に貰ったユニークスキルの『神の幸運』があるはずなのに、何故こうも事件が続くのだろうか？ 本当に勘弁してほしい。

……さて、俺は今、拠点の仲間を伴ってエスネアート王国の王都を目指して移動している。

意外にも旅は順風満帆で、出発から四日ほど経った朝、ついにはるか遠方に王都らしき影が見えてきた。

今日中に王都に入れるように、俺は御者を務めるエレナに少し速度を出すように指示を出した。

エレナは俺がこの世界に来て初めて話した女性で、拠点では魔物勢との会話の通訳してくれる、

欠かせない存在だ。

さらに、少し離れて馬車を囲むように狼獣人のマリアと虎獣人のリンという女の子が、馬に乗って並走している。この二人は奴隷商によって廃棄処分されそうになっていたところを俺が引き取った。

人が暮らす場所に拠点の魔物勢を連れて行くと問題が起きそうだから、代わりに彼女達が護衛を買って出ているが、そもそもこんな女の子に護衛をさせるのはある意味問題な気がする。

だが、どうせ何を言ってもついて来るので、とりあえず俺の目の届く範囲で気の済むようにやらせているというわけだ。いずれ成長したら、俺の護衛よりも他にやりたいことが出てくるだろう。

それにしても、王都か……。アルカライムでも初めて見るような物が結構多かったが、王都はどんな感じなのかな？ 考えるだけでも楽しみだ。

逆る気持ちを抑えて前方を見ていると、何故か『気配察知』スキルに引かかる集団があった。こんな何もない場所でこの集まり方……商人のザックさんが襲われた時の状況に似ている。

……いやいや、さすがにそれはないだろう。ここは王都の目の前だ。問題を起こせばすぐに捕まってしまうし、そうそう馬車を襲う奴はいないはず……だよな？

素通りしたいところだが、万が一にも何かあつてはいけな。俺は確認のためにその集団の方に向かうよう指示を出した。

近づくにつれて全貌が明らかになってくる。黒い覆面で顔を隠した者が多数、一台の馬車を取り

囲んで……交戦していた。

馬車側の護衛はまだ何人も生きており、馬車を守るべく奮戦しているものの、かなり追い込まれているように見える。

その原因は襲う側の人数だ。『気配察知』で確認できるだけでも四十人以上いる。

どう見ても馬車一台を襲うには多すぎる人数だ。

とりあえず、手遅れになる前に助けた方が良さそうだな。

早速俺が馬車を降りて、『土魔法』で野盗達を捕獲しようとしたら……何故かエレナから「待った」がかった。

「エレナ、急がないといけないのになんで止めるんだ？」

「この程度の相手にケンゴ様が出る必要はありません。私達で対処いたします」

「いやいや、襲われている人がいるんだから、みんなで助けに行った方が良いと思うぞ？」

それに、可愛らしい女の子があんな敵ついおっさん達に向かっていくのは、色々な意味で心配だ。先に『土魔法』で捕獲だけするのも駄目か？」

「駄目です。あれくらいの相手であればケンゴ様の魔力を使う必要すらありません。それとも、ケンゴ様は私達のこと信用できないのですか？」

「信用していないわけではないんだけど、心配なものは心配なんだよ」

しかし、エレナはまるで譲ろうとしない。彼女は時々こうして妙に頑なになる。

こうして話している間にも襲われている馬車の状況は悪くなるばかりだ。

「……仕方ない。今回は妥協するけど、もし誰かが怪我したらすぐに俺が出るからな？」

エレナは満足そうに頷き、早速声を張り上げた。

「はい、問題ありません。マリア!! リン!! 聞きましたね? もし相手から一発でももらったら、

後でゴブ一朗先輩達に訓練をつけてもらいます!! 覚悟して挑みなさい!!」

「はー!!」

気合いの入った返事とともにマリアとリンが馬から降り、野盗に向かって飛び出していった。

二人とも少し顔が怯えているように見えるけど、野盗が怖いというよりは、訓練にビビってるんだろうな。ゴブリンジェネラルのゴブ一朗は拠点でも最古参の強者で、実力も折り紙付きだ。

「ガアアアアア!!」

馬車から注意を逸らすためか、リンがいきなり大音量の威嚇を野盗達に浴びせた。

うおっ、ビックリした! ……リンの奴、いつの間に威嚇なんて覚えたのだろうか?

しかし、女の子があんな声を出しちゃ駄目な気がする。

俺がリンの教育方法に考えを巡らせている間にも、彼女は野盗達に素早く駆け寄って、目の前の男の首を刎ね、次々と斬り伏せていく。

野盗達はいきなりの襲撃と威嚇に浮き足立って、全く動いていない。

それにしても、以前ミノタウロスと戦った時に比べて、リンの動きが格段に速いような……

それにあれば……風か？

彼女は周囲に風を纏^{まと}っており、斬撃^{ざんげき}の合間に敵を吹き飛ばしている。

さらに後ろからはマリアが自身の周囲に展開した氷の矢を放ち、確実に野盗達の頭を吹き飛ばしている。

二人とも、ついこの間まで魔法なんて使えなかったはずだが、誰かに教わったのか？

いざ戦闘が始まると、リンとマリアの顔から怯えはすっかり消え去って、普段通りに戻った。

防御^{ぼうぎょ}に関してもマリアの補助があるおかげで、二人とも死角からの攻撃を問題なくかわしている。

認識した相手の未来が見えるユニークスキル『予知』——やはり、マリアのあれは反則だ。

そんな『予知』を持つマリアに攻撃を当てられるゴブ一朗達もどうかしていると思うが……

一方、生き残った馬車の護衛達も俺達の乱入をチャンスと見て、声を上げて野盗達を押し返しはじめた。先ほどまで大勢いた野盗達も、今ではもう数えるほどまで減っている。

俺が出る幕はなかったみたいだな。

俺は用意していた角^{つう}ウサギの頭の角——通称“角ミサイル”を、静かに収納袋へと戻した。

それからものの数分で野盗達は壊滅^{かいめつ}し、マリアとリンは殺した奴らを端から順に回収しはじめた。

……いや、戦果を回収するのは大事だが、もうちょっと襲われた馬車を気にしようよ。

二人が死体を回収するために馬車に近づくと、護衛達がこちらを警戒^{けいかい}して声を上げた。

「おい、これ以上近づくな！ お前達は何者だ!?」

マリアとリンは一瞬間をそちらの方に向けたが、すぐに興味をなくして死体の回収に戻っていく。いやいや、一応俺達は彼らを助けるために戦ったんだよ？ 二人とももうちょっと興味を持ってほしいと思う。ほら、馬車の人達も二人が相手にしてくれないから戸惑^{とまど}っているみたいだし。

最近、マリアとリンがだんだんエレナに似てきた気がする。助けたばかりの頃の初々^{ういっ}しさが懐かしい……

仕方なくエレナに救助者の無事を確認するように指示を出したものの、あからさまに嫌そうな顔をされた。何か気に障^{さわ}ったのだろうか？

とにかく話をしないことには先に進まない。俺は彼女達に頼むのを諦^{あきら}めて、自ら前に出る。

だが、俺達の馬車を近くまで移動させると、向こうの馬車の護衛達は剣を抜いて警戒^あを露わにした。

そりゃまあ、得体の知れない奴らが近づいてきたら、俺でもこんな反応になる。けど、俺達は一応あんた達を助けたんだぞ？ いくらなんでも警戒しすぎじゃないか？

俺はとりあえず敵意がないことを示すために、手を上げながら馬車を降^{くだ}りた。

「あのー、大丈夫でしたか？ 回復する手段がありますので、負傷者がいたら教えてください」

「そこで止まれ!! これ以上近づいたら問答無用で斬り伏せるぞ!!」

「……やはりこいつらも殺しましょう」

いつの間にか隣に来ていたエレナが、恐ろしいことを口走った。

「今の問答くらいで殺す必要なんて一切ないから、ちよつと落ち着いてくれ」

もの凄い殺気を放ちはじめたエレナを小声で宥めながら、相手の馬車を確認する。

馬車はザックさん達が乗っていたものと比べても一回り大きく、さらに側面には家紋と思しきエンブレムが大きく刻まれている。

恐らく、これはどこぞの偉い貴族様の馬車なのだろう。中にいる人物がほど大事なのか、護衛達も先ほどから一切警戒を緩めない。

厄介事の臭いしかない。このまま関わらないのが良策だな。

「わかりました。では、私どもはこのまま帰りますね」

再び馬車に乗りうと踵を返したところ……護衛の一人に呼び止められた。

「待て、お前達は何者だ？ 襲ってきた奴らとは関係ないのか!？」

こちらに剣を向けてくる相手に答える必要があるのかはなはだ疑問だが、後々問題になると面倒だ。一応、返事しておくか。

「旅の途中でたまたま通りかかった者です。馬車が襲われていたので加勢しただけですよ。それでは、私はこれで失礼します」

さっさと馬車に戻ろうとすると、向こうから女性の声がした。

「お待ちください」

「姫様!? 出てきてはいけません!! すぐにお戻りください!!」

護衛達が騒ぎはじめた。姫様って言ったか? いや、まさかな……

振り返ると、今まさに馬車を降りようとしているドレス姿の令嬢がいた。

歳はマリア達と同じくらい……十五、六歳といったところか。

金髪に金色の瞳。それが映える白を基調としたドレスには、各所に細かな飾り付けが施されている。

見た目はまさに、絵に描いたようなお姫様。それだけでなく、所作からもただならぬ気品が感じられる。

これは、本当に、*“そう”* なのかもしれない。だとすれば、一般人の俺がこの人の相手をするのは難易度が高すぎる。

『隠密』スキルが全力で仕事をしてくれることを期待しているが、恐らく無理だろう。

なんと言ったらいいいのか、あのお姫様、こちらを見る目力が強すぎる。その可愛らしい容姿からは想像できないほどの迫力だ。これは絶対にバレーている。

彼女は馬車を降りると、こちらに向かって優雅に一礼した。

「初めまして、私はクリステイナ・エリザベート・アン・エスネアートと申します。このエスネアート王国の第三王女です。気軽にクリスとお呼びください。まずはこの度のご助力、誠に感謝いたします。もしあなた方に助けていただかなければ、私達の命はなかったかもしれません。後日お



礼をさせていただきたいのですが、お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

いや、よろしくはない。できればこのまま何もなかったことにしたい。

俺の経験からすると、今回みたいに『神の幸運』が仕事をサボった時は必ず面倒事が起こる。

ほん本音を言えば会話すらも回避したいところだが、お姫様は先ほどから一切視線を逸らしてくれないので、逃げることもできない。

俺が返答に困っていると、我が拠点の救世主——通訳さんことエレナが動き出した。

「ようやく少しは話ができる人間が出てきたようですね。私は従者をしているエレナといいます。クリス……でしたか？ あなたの部下は駄^{しつ}がなっていないのではないですか？ 助けてもらった事実さえも認識せずに抜剣し、ましてそれを我が主^{あかし}に向ける始末。殺されても文句は言えませんか？ あなた方は今、我が主の善意で生かされているのです。しかも我が主の名前を聞きたい？ 冗談にしてはあまりにも面白くないですね。まずは謝罪をして、我が主に頭^{こゝろ}を垂^たれなさい。話はそれからです」

いやいや、この通訳さん、聞いているこっちがビックリするような内容をスラスラと繰り返すな。

相手は一応エレナ達の出身国のお姫様だろ。戦争でもするつもりか？

案の定、お姫様の周囲にいる護衛達が色めき立つ。

「き、貴様……ふざけるな!! 姫様に頭を下げるだど!? 今すぐ不敬罪で処断してやる!!」

次の瞬間、先頭にいた護衛の一人がいきなり吹き飛んだ。

よく見えなかったが、どうやら事前に行動を予知したマリアが、相手の死角に氷魔法で礫^{つぶて}を出して吹き飛ばしたようだ。

「エレナさん、勝手に行動して申し訳ありません。ですが、あのままだとご主人様に危害を加える可能性がありましたので、独断で対処いたしました」

「ええ、構いません。むしろよくやってくれました、マリア。我が主には万が一にもご迷惑を掛けるわけにはいきません。それに私もいい加減イライラしていたので、少しすっきりしました。良いお灸^{きゅう}になったのではないのでしょうか？」

いきなり吹き飛ばされたあの男性は、何がどうなったか理解できなかっただろう。

それより問題は、お姫様に対してケンカ腰なのはエレナだけじゃなかったことである。

今回マリアがたまたま『予知』で先行したが、リンの方も何かあれば今にも飛び出していきそうな感じだ。

我が拠点には穩便^{おんびん}にことを運ぶという思考を持つ人はいないのかな？ みんな好戦的すぎる。

ほら、お姫様を見てみる。あんなに目を見開いて固まっているじゃないか、可哀想に。

「お前ら!! 我が姫に——いや、我がエスネアート王国にケンカを売る気か!」
激昂^{げききよう}する護衛達に、エレナは淡々と言い返す。

「ケンカを売っているのはあなた方でしょう？ どうしますか、こちらはそのまま全てを滅ぼしても構わないのですよ？」

いったいどの魔王様のセリフだろうか？ このままだとまずい方向に話が進みそうだ。俺がエレナに交渉役を代わると持ち掛けようとしたその時——

「いい加減にしないで!! 私達はこの人達に命を助けていただいているのですよ？ 恩も返さず、その方々に剣を向けるなど、言語道断です。恥を知らない!!」

お姫様が声を張り上げた。

周囲が一樣に静まりかえる中、彼女はこちらに向き直り、頭を下げた。

「私の護衛達が無礼を働いたことを謝罪いたします。誠に申し訳ありませんでした」

「姫様……」

周囲の護衛達は啞然^{あげん}としている。

まさか自分達の態度が原因で、お姫様に頭を下げさせる事態になるとは思っていなかったのだろう。

「謝罪を受け入れましょう。用がなければもう行きますか？」

「お待ちください。助けていただいた上に不躰^{ふてい}だとは思いますが、お願いがあります。どうか話だけでも聞いていただけないでしょうか？」

「いいでしょう、詳しく話してみなさい」

なんだかエレナの方がお姫様よりも偉そうだ。

だいたい、彼女は主であるはずの俺の意思を一切確認してこないが、忘れられているわけではな

いよな……？

「単刀直入に申しますと、あなた方の力を見込んで、私達エスネアート王国を助けていただきたいのです。実は今、エスネアート王国と隣国のグラス帝国との間で戦争が起っています。その戦争に、あなた方の力を貸していただけないでしょうか？」

戦争……しかも現在進行形。やはりろくでもないことだった。それに、王国を助けるとか、お願いの規模が大きすぎるけど、大丈夫か？

溜め息をつく俺をよそに、エレナはさっさと話を進めてしまう。

「内容次第ですね。具体的には？」

「エスネアート王国とグラス帝国は、昔からお互いの領土を巡って争っていました。ここしばらくは国境で睨み合う程度だったのですが、グラス帝国が勇者召喚を成功させたことで、状況に変化が生じました。帝国は勇者への支援と、現魔王討伐のために、王国が保有する『魔王の魔石の欠片』を譲渡せよと要求してきたのです」

魔王の魔石とは、その昔、勇者が魔王を討伐した時に獲得したもので、現在はそれを分割して四つの大国が一つずつ保管しているという。その一つが、エスネアート王国にある。

確かに、帝国が魔王の魔石を集めているという話は、以前聞いたことがある気がする。そのため戦争の準備をしているとも。それがついに動き出したのか。

お姫様は深刻そうな表情で続ける。

「グラス帝国によれば、魔石の魔力を利用する方法を開発したのですが、こちらにはその情報の開示されていません。勇者召喚を成功させた帝国の技術力を信じると、一方的に圧力を掛けてきているのが現状です。しかしエスネアート王国としては、勇者の支援ならまだしも、利用方法もわからないのに魔王の魔石の封印を無闇に解除し、グラス帝国に渡すわけにはいきません。当然要求を拒否したところ、帝国側は『魔王討伐のために協力関係を築かないといけない時にその和を乱す行為は看過できない』と、因縁をつけてきたのです。あまつさえ『王国は既に魔王の手に落ちているのではないか』などと、あらぬ疑いまで掛けてくる始末。そして先日、一方的な降伏勧告の後、帝国が突然我が領土に攻め込んできて、戦争に発展してしまいました」

話を聞く限り、どうも帝国が調子に乗っているだけじゃないのか？

エレナも俺と同じ印象を受けたようで、少々呆れ顔だ。

「それで、あなた達はそんな状況で何をしていたのですか？ まさか逃げ出そうとしていたところを襲われていたのですか？」

——全く違った。今この場で一番調子に乗っているのは、間違いなくエレナだ。

お姫様は少しムツとした様子で頭を振る。

「馬鹿にしないでください。この国が減じる時まで、私が逃げることなどありません。戦況が思わしくなく、我が軍の不利な状況が続いていたので、近隣の領主に軍の派遣を要請しに出ていたのです。その帰り道で、運悪く賊に襲われてしまいました……」

「エスネアート王国の軍隊はそこまで弱いのですか？ それに本当に運悪く襲われたのでしょうか。馬車二台に対して四十人以上……あなたが乗っているのをわかって襲撃した、と考えるのが妥当でしょう」

エレナの指摘はもつともだ。戦争が行われている状況で、あの襲撃を偶然と捉えるのは楽観的すぎる。姫様は少し考える素振りを見せながら、言葉を継ぐ。

「我が国の軍隊は、近隣諸国と比較しても決して弱いとは思いません。日頃から練兵を続け、来る日に備えていました。しかし、今回のグラス帝国の軍隊は異様なんです。勇者召喚で士気が上がったのは当然としても、軍の中に黒い魔力を纏った精強な部隊があり、我が軍はこれに攪乱されています。そしてこれが本当に不思議なのですが……スケルトンやゾンビ等の魔物が何故か帝国の戦列に加わり、我が軍を圧倒しているのです。この二つが我が軍が劣勢になっっている主な原因です。どうにか対処する方法を考えなければなりません。それに私への襲撃が計画的なものだというのであれば、他に援軍の要請に出ているお姉様達が気になります。早く城に戻らなくては……」

「あなたが急いで戻ったところで、既に襲われているのであれば、結果は変わらないと思いますよ？」

いやいやエレナよ、それは少し言いすぎだ。見てみる、お姫様泣きそうだぞ？

前から思っていたのだが、彼女は どうして拠点の仲間以外には冷たいのだろうか？

明らかに人の気持ちというものを慮っていない。

拠点のメンバーも似たようなところがあるけど、会う人みんなにこんなことを言っていたら、完全に孤立してしまう。

そういえば、以前冒険者ギルドで採めたカスミちゃんが、優しかったエレナちゃんが冷たくなった”とか言ってたな。何か原因があるのか？

今度拠点に戻ったらカシムに聞いてみよう。エレナの父親の彼なら、何か知っているかもしれない。

そんなエレナがお姫様に容赦なく質問する。

「それで、あなたは具体的に私達に何をさせたいのですか？」

「……王都から北西に五日ほど行くと、ナミラ平原という場所があります。七日後には、そこで我が軍の総力を挙げた決戦が行われます。あなた方にはその戦線に加わっていただきたいのです」

おいおい、戦争に参加しろってことか。なんとなく想像はしていたけど、改めて言葉にすると実感が湧かないな。

涙を拭って懇願するお姫様を前にしても、エレナは険しい表情を崩さない。

「それに参加したとして、私達に何かメリットがあるのですか？」

「もちろんです。参加していただくだけでも報酬は用意しますが、戦果によっては、あなた方が望む物を差し上げましょう。私に用意できる物に限りですが」

この言葉を聞いたエレナが、顎に手を当てて考える素振りを見せる。

珍しいな。何か欲しい物があるなら、言ってくれば俺が用意するのに。

「……それでは、報酬としてあなたを買いましょう」

ん？ 今なんて？

一瞬エレナが何を言い出したのか理解できなかったのは、俺だけではないだろう。

周囲を見てもみんな首を傾^{かし}げているし、言われた本人に至っては思考が停止しているようだ。少しして、ようやく放心状態^{かし}が解^とけたお姫様がエレナに尋ねる。

「それはどういうことでしょうか？」

「言葉の通りですよ。あなたの全てを買い取ります。あなたの体はもちろん、心や魂^{たましい}まで、我が主に捧^{ささ}げていただきます。その代わりに、帝国を蹴^け散らすだけの力を与えましょう」

姫様はその内容を聞いて驚愕^{きょうがく}の表情を浮かべた。

最近エレナは変な凄^{しみ}みが出てきているな。だいたい、願いを聞く代わりにお姫様を貰うとか、今度はどこの悪魔のセリフだろうか？

別に俺は魂^{たましい}まで欲しいなんて思っていないが、ここまでほぼ空気と化していたので、今さら会話に入りづらい。

エレナも俺を主と仰^{おほ}ぐ割^{わり}には一切意思確認しないし、忘れられている可能性も否定できないよ、これ。

そもそも、現在交渉しているこの子は、どこぞの村娘とかではなく、エスネアート王国の王女だ。

いなくなったら周囲に与える影響とか大きいんじゃないや……

お姫様はしばし驚^{おどろ}きで呆然^{ぼくぜん}としていたものの、徐々にその顔が真剣な表情に変わっていく。

「それは本気でしょうか？」

「何を本気と確認しているのでしょうか？ あなたを貰う件ですか？」

「いえ、グラス帝国を蹴^け散らすと言ったことです」

「ええ、本気ですよ。私達が用意する部隊を最前線に配置してもらう必要はありますが」

お姫様は少し考えてすぐに答えを出した。

「わかりました。その条件を呑^のみましょう」

おお、なんと肝^{きも}の据^すわった女性なんだ。これも国を思えばこそその行動なのか……

なんだか他人事^{たにじ}のように納得してしまっただが、お姫様の護衛達は黙^{もく}っていない。

「姫様いけません!! あなたはこの国になくてはならない人物なのです!! しかもこんな得体の知れない人物の言うことを真に受けて、御身^{おんみ}を危険に晒^{さら}してはいけません!!」

まったくもってその通りなので、何も反論できない。

しかし、お姫様は決意の色を宿した目を彼らに向ける。

「確かに信用するには時間が足りません。しかし、条件が達成できなければ従う必要もないのです。黒い魔力の部隊や、魔物の軍勢を倒せる手段が見つからない現状で、もし本当にこの人達が帝国を撃退できるなら、私の命一つくらい、安いものです」

「ですが、姫様……」

「もう決めたことです。あなた達もエスネアート王国に仕える者の一人なら、国を第一に考えて行動しなさい。それと、彼らに私のメダルを渡しますので用意してください」

「……わかりました」

護衛の一人が馬車の中に戻り、一枚の手のひら大のメダルをエレナに手渡した。

もう完全に彼女が我が拠点の代表だと認識されているな、これは。

メダルを受け取ったエレナが、それをしげしげと眺めながら尋ねる。

「これは？」

「そのメダルには王家を示す家紋が入っています。王家が後ろ盾になることを証明する物です。このエスネアート王国であればどこに行っても、そのメダルを見せるだけで一定の支援を受けられます。それを持って、すぐに軍に加わってもいいですし、直接ナミラ平原に向かって合流しても構いません。ただし、くれぐれも七日後の期日に遅れないようにお願いいたします」

「わかりました。では、私達は直接ナミラ平原に向かうとしましょう。少しやりたいこともありま

すし」

お姫様はエレナの言葉に頷くと、最初と同じように優雅に一礼した。

「では、私達も急いで城に戻らなければいけないので、これで失礼いたします。この度は助けていただき、本当にありがとうございました。必ずお礼をしますので、戦争が終結したら、ぜひ城にお

いでください」

お姫様はそう言うのと、よほど急いでいたのか、すぐに馬車の中に戻っていった。

遺体の回収や負傷者の手当などのために護衛の大半を置いていったが、大丈夫なのだろうか？

先ほど襲われたばかりだというのに、不用心すぎる気がするけど……

俺はお姫様を心配しながら馬車を見送った。

「これは……遠くで見るとそこまで感じなかったが、かなり大きいな……」

俺は王都を囲む城壁を見上げながら、そう言葉を漏らした。

お姫様一行と別れた俺達は、ほどなくして王都に到着。城門での検問で、早速お姫様から貰ったメダルが役に立った。冒険者ギルド証の提示だけで入れるのかどうか、ぶっちゃけ不安だったけど、これは僥倖だ。このメダルを得られただけでもお姫様を助けた価値はあるな。

城門を潜ると、そこはアルカライムを上回る活気で溢れていた。

道は綺麗に整備されているし、ここからでも色々な人種の人達が歩き回っているのが見える。建物も二階建て以上のものがほとんどで、景観を崩さぬように整然と立ち並んでいる。

そして一番驚いたのは、中央に聳え立つ巨大な城だ。

生前は城といったらまず日本風の物を思い浮かべていたけど、目の前にあるのはヨーロッパ風である。どの角度からも美しく見えるように意匠や造形が工夫されていて、その存在感は圧倒的だ。さすがこの国の象徴だな。

実際に城を見るのは初めてだった俺は、しばし城を眺めて、その風景を楽しむ。

だけど、こういう場所に住んだら、自分の寢床に行くだけでもかなり歩きそうだな……

そんな間の抜けたことを考えていると、エレナが話しかけてきた。
「大丈夫ですよ。確かにエスネアート王国の王城は立派ですが、ケンゴ様にはこれよりも大きく素晴らしい城を必ず用意します。安心してください」

俺はいったい何を安心すれば良いのか？

そして、何故エレナは俺がこれよりでかい城に住みたいと思っていると勘違いしたんだ？

今拠点にある、『土魔法』で作った箱形の寢床でも満足しているのだが、あれじゃ駄目なのだろうか？

寢床を出たらすぐに“酸っぱい果実”が食べられる好立地なのに。

俺はいざれとんでもないことになりはしないかと、戦々恐々としながら馬車を走らせた。

さて、ナミラ平原での決戦は七日後。移動に五日かかるというので、明日か明後日に出れば間に合う。せっかく王都に來たのだし、買い物や観光もしてみたい。

だが残念ながら、俺達の中に王都に詳しい者は一人もいない。加えて、俺はアルカライムでも迷

子になったほどの方向音痴だ。右も左もわからない王都でどうなるかは、火を見るよりも明らかであろう。

さあ、どうしようか……といっても、選択肢はないに等しい。

とりあえず歩くか。迷子になったら拠点に戻れば大丈夫だしな。

城門近くの厩舎に馬車を預けた俺達は、目につく商店にかたっぱしから入り、道を聞くついでに初めて見る物や珍しい食べ物を買って漁って回った。

ここで一番俺の興味を引いたのは“リバーシ”だ。まさか地球と同じボードゲームがあると……

これを買っていたおっちゃんに聞いたところ、どうやら“帝国に召喚された勇者が開発した遊び”ということになっているらしい。

帝国の勇者は間違はなく俺と同じ地球出身だろうな。

しかし、異世界に来てまで同郷の人に会えるとは思ってもみなかったな。少し嬉しくなって、思わずにやけてしまった。

そんな俺を、エレナ達三人は驚いたような顔で見ている。なんだろう、ボードゲームでにやけた顔がそんなにおかしかったのか？

俺はさっきまでの嬉しさも忘れ、すっかり足取りが重くなってしまった。

あらかた買い物を終えたので、俺達は拠点で活躍してくれそうな奴隷がいなかったかを確認するため

に、奴隷商へ向かった。

ところで、歩いていて一つ気付いたことがある。

——エレナ達がこの凄く目立つのだ。

初めて見た時から綺麗な子達だと思っていたけど、最近は雰囲気はかなり変わってきた。単に目を引くだけではなく、存在感があるというか……

出会った時のちよつとそそっかしい感じが懐かしい。

だが、メリットもあった。

さっき入った店でも割引してくれたし、何より、この三人のおかげで俺が目立たなくなったのだ。道中声を掛けられるのは百パーセントこの三人なので、恐らく俺は周囲の人にとって三人の横にいる霞程度にしか見えていないのだろう。あまり目立ちたくない俺には大変ありがたい。

このまま一人、誰にも気付かれず王都観光と洒落込むのも悪くないが……問題はエレナ達が他の住民に話しかけられながらも、俺から一切視線を外そうとしないことだ。

彼女達もだんだん俺の性格を理解してきているのだろう。

大丈夫、逃げないからそんなに見ないでほしい。

俺は蛇に睨まれた蛙のように縮こまりながら、奴隷商の入り口を潜った。

「いらつしやいませ、お客様。本日のご用件はなんでしょうか？」

俺達が店に入ると、いきなり受付にいた男の一人に話しかけられた。

さすが王都だけあって、この店はアルカライムにあった奴隷商の店よりもはるかに大きい。当然、雇っている人間も多いようだ。

俺はエレナ達を入り口で待たせて、男に答えた。

「今日は奴隷の購入にきました。良い奴隷はいますか？」

「奴隷の購入ですね。もしかして、お客様は戦闘奴隷のご購入をお考えですか？」

「いえ、どちらかというところを造るとか、発展させられるスキル持ちを探しています。戦闘奴隷だと、何か問題があるんですか？」

「はい、現在エスネアート王国が帝国と戦争状態にあるのはご存じの通りです。近々行われる決戦に備えて、戦闘奴隷は全て王国に買い取られ、在庫不足になっています。最近は一に備えて、自分の身を守るために戦闘奴隷をお求めになられるお客様も多数いらっしゃるのですが、もう売れる戦闘奴隷がありません。おかげでクレームが多くて困っているんですよ」

そう言って、店員の男は苦笑する。

「それは大変ですね。エスネアート王国にとって、戦況は思わしくないのですか？」

「だいぶ旗色が悪いみたいです。この後ナミラ平原で決戦が行われるのですが、それ次第で王国の命運が決まりそうです。ナミラ平原を抜ければ合戦に適した要所も少なく、王都まで一直線ですからね。私も、すぐに逃げられるように準備をしております。お客様も用心した方が良いでしょう」

エスネアート王国はそこまで厳しいのか……

魔物の軍団と怪しい黒い魔力を纏う者達が原因らしいから、一応、後でゴブ一朗達に油断しないように伝えておこう。

「教えてくれてありがとうございます。用心しておきます」

「それから、馬も在庫が少なくなっているんで、早めの購入をお勧めしますよ。それでは本題ですが……お客様は街の建設や発展に寄与するスキルを持つ労働奴隷をお探し、ということでしょうか？」

「はい、それでよろしくお願いします」

「それでは見繕みづろってきます。少々こちらでお待ちください」

店員の説明によれば、『建築』『測量』『石工』『鍛治かじ』『魔道具製作』『鍊金』『服飾』『農耕』『會計』『政務』『商売』『教育』『畜産ちくさん』と、様々なスキルを持つ奴隷達だそうだ。

さすが王都、多くのスキル持ちを揃そろえている。

「どうですか、お客様、気になる奴隷はいましたか？　こちらは全て借金奴隷ですので、安心してご購入いただけますよ」

「凄く多様なスキル持ちを揃そろえているんですね。王都の奴隷商にはいつもこれくらいいるんですか？」

「はい、大体は似たような種類を揃そろえていますよ。王都は住んでいる人間も多いので、いろんな理由で奴隷に落ちる方がいるんです。もちろん国外からも仕入れますが、やはり一番多いのはこの王都ですね」

「そうなんですか。私も奴隷に落ちないように気をつけないといけませんね」

店員と言葉を交わしながら、一通り『鑑定』で奴隷達を見ていく。

みんな特に変わったところはなさそうだ。

「では、今回は『魔道具製作』の男性と『鍊金』の女性をお願いします。労働の期間と金額はいくらくらいになりますか？」

できれば『教育』や『畜産』等のスキル持ちも購入したいが、現状拠点には子供もいないし、飼っているのはハニービーくらいだ。急ぐ必要はないだろう。

「『鍊金』は金貨六枚で約一年の労役ろうえき、『魔道具製作』は金貨九枚で一年半ほどの労役になりますね。購入されますか？」

「はい、お願いします」

「ご購入ありがとうございます。それでは契約しますので、こちらにお願いします」

店員に奥の部屋へと促うながされるが、俺にはもう一つ聞いておかなければならないことがある。

「すみません、その前にもう一つお聞きしたいのですが、よろしいでしょうか？」

「はい、为什么呢？」

「この奴隷商には『訳ありの奴隷』とかはいますか？」

男はその言葉を聞き、少し考えるような素振りを見せる。

「その質問に答える前に、こちらにも一つ質問をして良いでしょうか？」

「ええ、構いませんよ」

「もしかして、お客様はアルカライムで訳あり奴隷を買われませんでしたか？」

……!? まさか、もうそんな情報が出回っているのか？

俺はそのセリフに驚愕を禁じ得なかった。マリア達を購入してまだ一カ月も経っていないのに、王都まで広まっているとは。

「はい、確かにアルカライムで訳あり奴隷を購入したのは私ですが、それが何かあるんですか？」

「ああ、いえ、たまたま噂を耳にしたのです。アルカライムの奴隷商の男が『呪い子』や傷物の奴隷を引き取っていった奇特な人間がいると吹聴して回っていたので、もしやと思ひまして。その話は今やこの界限ではみんな知っていますよ」

あの店主、やってくれたな……この世界には守秘義務というものはないのだろうか？

しかも、誰が奇特な人間だ。今度会ったらどうしてくれよう……

「なるほど。それで、この店には訳あり奴隷はいるんですか？」

「ええ、一人だけです。こちらにどうぞ」

やっぱりいるのか……

俺はマリア達が置かれていた悲惨な境遇を思い出し、覚悟を決めて店員の後に続いた。

「こちらです」

受付の男が開けたドアの先にいたのは、枷も何も付けられず、ただ木の椅子に座って物憂げに壁を見つめる女性だった。

「この人が？」

「ええ、声を奪われた歌姫サラ・リヴァイスです」

「声を奪われた歌姫ですか？」

「はい。お客様はこの歌姫の事件をご存じないのですか？」

「ええ、王都には最近初めて来たもので、そういう情報には疎いのですよ」

「そうでしたか。実はこのサラ・リヴァイスは、数年前まで、この王都で知らぬ者はいないほどの有名人だったんですよ。その歌声を一度聴けば天にも昇るほどの高揚感を覚え、万人が涙するとまで言われていました」

「それは凄いですね」

「ええ、さらに甚では、彼女の歌を聴いた後、身体の調子が良くなったり怪我が治ったりといった噂も数多くありました。そんな彼女を、市民は畏敬の念を込めて『天の歌姫』と呼んでいました」
歌声一つで身体の不調を治せるとは、本当に凄いな。これも何かのスキルの影響だろうか？
スキルブックには歌スキルなんて見当たらなかったが……

「しかし、彼女の栄華はそう長くは続きませんでした。嫉妬か誰かの陰謀かはわかりませんが、とある貴族が主催するパーティの席で、彼女が口にした飲み物に毒物が混入していたのです。彼女は毒物によって喉を焼かれ、その日から声を失いました。彼女の支援者達は多くの金銭を掛け、医者を呼んだり薬を取り寄せたりしましたが、結局誰一人として彼女の喉を治せませんでした」
可哀想に……

俺は店員の話聞きながら、彼女に『鑑定』を掛ける。

やはり、彼女のステータスにはユニークスキルとして『歌唱』があった。歌の種類や歌い方によつて対象者に数多くの恩恵や弊害を与えることができるらしい。

凄いな……俺の『付与』スキルと違って、対象者に弱体化——デバフも掛けられるのか。能力を悪用したという話が出てこないから、恐らく良い人なんだろう。

店員は続ける。

「その後、奴隷に落ちるのは早かったですね。薬を探すために多額のお金を借りたものの、喉は治らず、借金膨らむばかり。支援者達にも見限られ、家族さえ彼女の収入を当てにしていたのか、喉が治らぬことに憤慨し、家から追い出しました。彼女がここに来た時は、それはもう酷い状態でしたよ」

マリアといい、リンといい……この世界ではユニークスキル持ちは必ず不幸になり、奴隷に落ちるのだろうか？　今のところ、俺以外百パーセント奴隷だ。

俺も『神の幸運』持ちのわりには少し不幸な気がするが、まだ彼女達に比べれば運が良い方だと思う。

「しかし、声が出せないのでは会話もままならないですし、他に特に目立ったスキルもない……おまけに背負っていた借金の額も相当だったため、なかなか買い手つきません。そうなる性と奴隷か鉱山労働くらいしか道が残されていませんでした。ですが、どうにもそれは忍びなくて……労働奴隷として購入してくれる人を探していたんですよ」

「そうですか。独断でそんなこととして大丈夫なんですか？」

店員の男が苦笑しながら答える。

「ああ、申し遅れました。私はこの店の店主をしているグレイブと申します。以後お見知りおきを」

「店主さんだったんですか、失礼しました。それにしても、どうして彼女に対してそこまでするんですか？　あなた方にとって、彼女は『商品』なのでは？」

俺は率直な疑問を口にした。

「実は私、彼女のファンです。叶うなら、もう一度彼女の歌声を聞きたいと思っています」

「なるほど。それで、この奴隷は売っていただけのですか？」

「売っていいですが、条件があります。彼女を労働奴隷として正当に扱うこと、そして、できる限り彼女の声が戻る方法を探すこと、この二つです」

「その程度であれば構いませんよ」

恐らく彼女の声が出ない原因は、喉が焼けて声帯が働かないせいだろう。それなら回復魔法で治るはずだ。万が一治らなければ、一度声帯を切除し、部位欠損と同じく再生してやるという手もある。

「簡単に仰いますね。結局、私には彼女を救えませんでした。どうか彼女の声を取り戻す手段を見つけてください」

「わかりました。それで、彼女の値段は……？」

「無料でいいですよ。そのかわり、もし彼女が声を取り戻すことができたなら、一度だけ私に彼女の歌を聴かせてください」

「無料!? 彼女の借金額はかなりのものだという話ですが」

「負債は私が肩代わりします。ただし、法律で定められた労働義務は残っていますので、彼女はその費用の倍額分を、お客様のもとで働いて稼ぐ必要があります。期間は五年です」

「五年も? そうなると、かなりグレイブさんの負担が大きいですくないですか?」

「気にしないでください。彼女の歌がまた聴けるのなら、安いものです。それに、お客様であれば彼女を治すことができそうですね。先ほど入り口でお見かけた獣人の子、アルカライムの訳ありの奴隷の子でしょう?」

凄いな、この店主。少ない情報からそこまで予想するとは、なかなかどうして侮れない。アルカ

ライムの奴隷商とはえらい違いだ。

「わかりました。彼女の喉が治ったら、必ず歌を聴かせに来ますよ。それに彼女もあなたには感謝しているでしょうしね」

「そうだと嬉しいんですがね」

店主ははにかみながらそう言うと、彼女の手を取ってこちらに連れて来た。

俺にはそれがまるで大事な恋人を扱うような仕草に見えた。

必ず治療して、この人の前に連れてこよう。

俺はそう心に決め、店主と一緒に奴隷達の契約をするために、奥の部屋へと移動した。

その後、問題なく奴隷契約を終わらせて、俺達は奴隷商を後にした。

次は王都の冒険者ギルドに向かおうと考えているのだが……というわけか、先ほどよりも多くの視線を集めている気がする。

購入した奴隷達を含めて八人の集団になったのはあるにせよ、それだけが原因じゃないような……

俺が訝しんでいると、突然年配の女性が話しかけてきた。

「ちょっとあんたら、後ろに連れているのは歌姫じゃないのかい？」

ああ、サラが原因だったか。

「ええ、そうですが、何か用ですか？」

「いや、最近めつきり見なくなっていたものだから、気になっていてね。もう喉は治ったのかい？」

「いえ、まだです。これから治療に向かうんですよ」

「ああそうかい！ 治ったら教えておくれ！ 急にいなくなつて、みんな心配していたんだよ。歌姫の歌を楽しみにしている人はまだ大勢いるんだから、頑張つて喉を治すんだよ!! ほら、これ食べな」

そう言うと、女性はサラに何かを手渡して去っていった。

気になって確認すると、それは少し歪いびつな丸い物……おそらく飴玉あめたまだった。

この世界じゃ砂糖は貴重だろうに……

サラはとても嬉しそうに微笑んでいた。

うん、やはり美女には笑顔が似合うな。エレナももっと笑うと良いのに。

しかし、店主は応援していた人も見限つたと言っていたが、周囲の反応を見ると、全然そうは思えない。何かあるのだろうか？

まあ、サラが治つて王都でまた歌い出せば、自ずとわかるだろう。

そんなことを考えながらしばらく歩き、俺達は王都のギルド前に到着した。

建物は三階建てで、アルカライムのギルドより一・五倍ほど大きく見える。

しかも、この建物は先ほど入ってきた街の門の目と鼻の先に存在しているではないか。全く気がつかなかった。

無知というものは恐ろしい。どこかに地図は売っていないだろうか？

中に入ると、さすがに王都だけあって、人でごった返していた。

アルカライムのギルドとは違って酒場はなく、受付カウンターの数が多い。依頼の掲示板や資料の書庫なども大きく見える。

入り口付近で室内を眺めていると、早速二人組の男に声を掛けられた。

「おい！ ねーちゃん！ 初めて見る顔だな？ これから冒険者になるなら、俺が手ほどきしてやろうか？」

「おいおい、お前じゃ力不足だろう！ こんな別嬪べっぴんだ、俺くらいじゃねーと釣り合わねーよ」

話しかけられたのは俺じゃなかった。危うく片手を上げて反応しかけたじゃないか……

しかし、エレナは男達を一瞥いちべつしただけで、そのまま俺の後についてきた。

この手の輩やからは無視するともっと絡んでくるものだが……

「おい!! 無視してんじゃねーよ!!」

「お高くとまつてると、痛い目見るぞ!」

案の定、腹を立てた男達がエレナの腕を掴もうとするが——それを予知していたマリアとリンに

ぶん投げられた。

テーブルが倒れて皿やグラスが割れ、凄（ひど）い音が響く。

確かに、綺麗な人を見つけて絡みなくなる気持ちにはわからなくはないけど、ここは王都のギルド内だぞ？ アルカライムでもギルドマスターのクリフォードさんが「ギルド内で暴力沙汰（ぼうりょさた）は御法度（ごほうど）」と言っていた。さて、今回は誰が出てくるのだろうか？

そうこうしていると、騒（さわ）ぎを見ていた人や聞きつけた人が周りに集まりはじめた。

「おいおい、ギルド内でケンカか？」

「命知らずもいるもんだな！ それに、あれ歌姫（うたひめ）じゃねーか？ 久しぶりに見たぞ」

「なんだって!? 歌姫（うたひめ）だど!! どこだ!? 俺（俺）ファンなんだよ！ サイン貰（もら）えねーかな」

「それにしても、あの三人は美人（びじん）だな。初めて見るが、新人（しんじん）か？」

周囲（しゅうい）の人間（にんげん）は好き放題（しゅきほうだい）話（わ）しているが、倒れた男達（おとこたち）を助けようとする者（もの）はいない。

どうしよう？ うちの奴（やつ）らがやったことだし、俺（俺）が介抱（かいほう）しに行くかな。

俺（俺）が倒れた男達（おとこたち）の方（ほう）に向（む）かおうとしたその時（とき）……

「あらあら、これはいったいどういうことかしら？ 問題（もんだい）起こしたら、私が「個別指導（こくべしどく）」を行うと明示（めいし）していたはずよ？ 今回は誰（たれ）が私（わたし）と一緒に熱（あつ）い夜（よ）を過ごしてくれるのかしら？」

そこには「二メートルを超える大きな男（おとこ）」——いや、女（め）だろうか？ 性別（せいべつ）不詳（ふしょう）な巨体（こたい）が立（た）っていた。

筋骨隆々（きんくろうろう）で見事（たい）な体軀（たいく）をしているものの、顔（かお）は化粧（けいよう）で綺麗（きれい）に彩（いろど）られ、髪（かみ）も長（なが）くて、言葉遣（ことばづかい）いも

女性的（じょせいてき）。

性別（せいべつ）は不明（ふめい）だが、誰（たれ）でもわかる簡単（かんぱん）なことがある。

あの人（ひと）と二人（ふたり）で熱（あつ）い夜（よ）を過ごすのだけは、絶対（ぜったい）に回避（かいはい）しなければならないということだ。

すると、珍（めづ）しくマリアが手（て）を挙（あ）げて、その「男女（おとこめ）」に答（こた）えた。

「その寝（ね）ている男（おとこ）の人（ひと）達が、エレンさん——この赤（あか）い髪（かみ）の女性（じょせい）に言（い）いがかりを付（つ）けて、掴（つか）みかかろうとしていたので、私（わたし）とこの子（こ）、リンと二人（ふたり）で投げ飛ば（なげ飛ば）しました。お騒（さわ）がせして申し訳（わけ）ありませんでした」

「ごめんなさいです」

マリアに続いてリンも謝罪（しやざい）し、二人（ふたり）は素直（すじき）に頭（あたま）を下（さ）げた。

凄（ひど）いな、周囲（しゅうい）の雰（ふん）囲（い）気（き）が一（いっ）気にマリア達（たち）を被害（ひがい）者に押（お）し上（あ）げてしまった。

俺（俺）が二人（ふたり）の機転（きてん）に驚愕（きょうがく）していると、「男女（おとこめ）」が喋（しゃべ）りだした。

「三人（ふたり）とも私（わたし）には劣（おと）るけど、確かに綺麗（きれい）な顔（かお）をしているし、その寝（ね）ている男（おとこ）達が声（こゑ）を掛（か）けたのもわからなくないわね。誰（たれ）か、その現場（げんば）を見た人（ひと）はい（い）るかしら？」

入り口（いりぐち）にいた男（おとこ）が手（て）を挙（あ）げて答（こた）える。

「あー、俺（俺）も偉（偉）い別嬪（べっぴん）が入（い）ってきたから見てたけど、大方（おおおかた）彼女（かのう）らが言（い）ってることは間違（まちが）いねーよ」

なんだ、初め（はじめて）はどうなるかと思（おも）ったけど、良（よ）い人（ひと）が多いな。

いや、あの「男女（おとこめ）」が怖（こわ）いだけか？

「これで今夜の私の相手が決まったわね。それじゃ、あなたとあなた、そこで寝ている男が起きる前に、縛^ばって私の部屋に連れて行っちゃって」

よほど「男女」が怖いのか、指名された男達は寝ている男達を即座に縛^ばって連れて行つた。縄の保管場所も把握していたし、かなり手慣れているみたいだ。

これが王都のギルドの日常なのか？ だとしたら恐ろしいな……

俺が密かに身震いしていると、エレナが「男女」に話しかけた。

「それでは、私達はもう行つてもいいのですか？」

「ええ。うちの冒険者が迷惑を掛けたわね。ところで見ない顔だけど、あなた達、このギルドは初めてかしら？ お詫^わびに私が案内しましょうか？」

「いえ、結構です。ケンゴ様がギルドに用があるようでしたので、立ち寄っただけです」

ナイスだ、エレナ。あの「男女」に付きまとわれては、ゆっくり探し物もできない。

エレナの英断を褒めようとした時、突然、「男女」の大声が響き渡った。

「全員、その新顔達を包囲しなさい!! 各自の判断で捕縛^{はぼく}!! 抵抗するなら、多少の暴行も許可します!!」

一気にギルド内が殺気立つ。

「男女」の言葉を聞いた冒険者達が即座に展開し、エレナ達を取り囲んだ。

まあ、元からほぼ囲まれているような状況だったが、それが急速に密度を増して狭まった感じだ。

そして何故か俺はその包囲の外にいる。

みんな俺に気付いていないのか、ギルドに入った時からずっと、視線すら向けてくれない。

この『隠密』スキル、少し働きすぎじゃない？

俺が落ち込んでいる間に、冒険者達が後方にいた奴隷達に襲いかかった。

まずいな、今日雇った奴隷達は戦闘関連のスキルがない。

このまま捕縛^{はぼく}されてしまうかと思ったが——やはり『予知』スキル持ちのマリア達の動きの方が一足早かった。

マリアとリンが左右に分かれ、襲いかかる冒険者達を吹き飛ばして牽制^{けんせい}している。

ああ、リンにやられた奴は『スキル強奪』でスキルを奪われたな、可哀想に。

倒れた男は自分の身体の変調を感じ取って、あちこち手で触って確認している。

続けて、冒険者達と少し離れた場所で炎が噴き上がり、一気にギルド内の温度が上昇した。

それを見て、「男女」や冒険者達が目を見開く。

そう……エレナがその身に炎を纏^{まと}いだしたのだ。

髪が炎のように逆巻き、高温で彼女の周囲が歪^{ゆが}んで見える。

エレナは毎回ギルドで炎を使うが、火事とか大丈夫なのだろうか？

それにほら、冒険者達だけじゃなくて、うちの奴隷達も驚いているから少しは加減をしてほしい。「これはどういうことか、説明してもらえませんか？」

エレナの怒気に気圧^{けお}されて、包囲する冒険者達が後退しつつある中、“男女”が口を開く。

「エレナちゃん？ あなたがさっき言っていたケンゴ様はどこにいるのかしら？」

エレナは苛^{いら}立たしげに応える。

「話になりませんね。私は説明を求めているのですよ？ 何故私がケンゴ様の所在をあなたに教えるなければならないのですか？」

「そのケンゴ様に、指名手配が掛^かかっているからよ」

——!? 指名手配？ 俺が？

最近お姫様を助けたり、アルカライムでは黒の外套の殲滅^{せんめつ}に一役買ったりと、なるべく人のためになるように行動している俺に、指名手配？ 全く心当たりがない。

パニックになつていいる俺を尻目に、エレナが“男女”に問い質^{ただ}す。

「ケンゴ様に指名手配が掛かるなど、何かの手違いです。罪状はなんですか？ あまり適当なことを言う、後悔しますよ？」

「罪状は洗脳と誘拐^{ゆうかい}。さらに、強姦^{ごうかん}や殺人などの疑いもあるわね。少額ながら懸賞金が懸けられているわ。それから、黒の外套と繋が^{つな}がっているという噂もあるわよ？」

なんだと……？

確かに殺した相手を召喚して拠点でこき使っているから、洗脳と誘拐、そして殺人は当てはまらなくはない。しかし、強姦は事実無根だ。

そんな俺の心の叫びをエレナが代弁する。

「それは完全に冤罪^{えんざい}ですね。そもそも、ケンゴ様を罪に問おうするなど、それ自体がおかしい。誰がそんなことを言い出したんですか？ 私はその人の方が怪しいと思いますよ？」

「指名手配は、身分が証明されている冒険者ギルドの職員からの申し立てで出されているわ。これが嘘なら、その職員は首を刎^わねられるわね。でも、あなたの証言は参考にならないわよ、洗脳されたエレナちゃん？」

「私が洗脳されていると言うのですか？ 冗談は顔だけにしてください」

口調こそ穏やかだが、双方とも怒りで顔が引きつり、一触即発^{いっしょくはつ}の雰囲気だ。

「あら、言うわね？ でも指名手配の内容に、既にあなたは洗脳されたとあるわよ？」

「ふざけたことを……」

ああ、これはまずいな。こちらは無罪を証明する手段がない。だが大人しく捕縛されるわけにもいかない。

俺が捕縛されたら拠点の奴らは黙っていないだろうし、お姫様との約束を守れなくなる可能性も出てくる。しかも、俺達が行かないとナミラ平原での決戦は敗色濃厚だ。

エレナが“男女”に斬^きりかかって引^きつ込みがなくなる前に、一度話してみるか。

「はいはい、ストップストップ!! ギルド内で暴力沙汰は御法度だよー!!」

俺はとりあえずクリフォードさんの真似をしながら、この騒動を止めようと試みた。

決してふざけているわけではない。ああいう口調の方が警戒されないと考えたからだ。

急におかしな制止が聞こえたせいか、みんな一斉にこちらを振り返った。

よし！上手くいったな。

俺は全員の視線を浴びながら話しかける。

「どうも皆様、こんにちは、私が件のケンゴでございます。私の身内がご迷惑をお掛けして大変申し訳ありません。なんだか大事おかしになっていますが、少し説明させていただきませんか？」

「あなた、いつからそこにいたの？」

「男女」が目を見開き、驚愕の表情でそう尋ねてきた。

「初めからいましたよ？」

それを聞き、周囲が静まりかえった。

「それで、私に掛けられた罪状や嫌疑けんぎについて話したいのですが、あなたに話せばいいですか？」

俺は「男女」にそう問いかけた。

あとエレナ、熱いからもうちょっと温度を下げてくれ。

「ええ、私で構わないわ。素直に捕縛されてくれる気になったのかしら？」

「いえいえ、申し訳ありませんが、今は捕縛されるわけにはいかないですよ。なので、少しお話をしようと思っています」

「話？いいわ、聞くだけ聞いてあげるわよ」

「ありがとうございます。では、まずあなたの名前を伺ってもよろしいですか」

「あら、私としたことが……ごめんなさいね。私はカズコって言うの、よろしくね」

「よろしくお願いします。では、まず初めに、その指名手配の内容は冤罪だと主張します。次に黒の外套と繋がっているという嫌疑ですが、これも事実と異なります。カズコさんはアルカライムで黒の外套が殲滅されたことはご存じですか？」

「ええ、知っているわ。アルカライムの英雄モータンと、その仲間が殲滅したのよね？」

モータン達はもともと山賊だったが、今は拠点の一員で、通貨獲得のために冒険者パーティとして活動中だ。ついでに、俺やゴブ一朗などの代わりに功績を挙げた立役者として表舞台に立つてもらっている。

「はい、実はそのモータン達は私の部下で、殲滅も私と一緒に رفتんですよ。これはアルカライムのギルドマスターであるクリフォードさんが証明してくれます」

「それは本当なのね？」

「ええ。問い合わせてみてください」

カズコさんは受付にいた女性に何か言い付け、水晶のような物を持ってこさせた。

魔道具だろうか？

カズコさんが魔力を流して操作すると、その水晶から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「もしもし？ いったいどうしたんだい？ カズコちゃんの方から連絡してくるなんて珍しいね？」

「久しぶりねクリフォードちゃん。ちよつと聞きたいことがあるんだけど、いいかしら？」
「いいいいよ、なんでも聞いてよ」

相変わらずフランクな男だな。しかもお互いちゃん付けで呼ぶとは、仲が良さそうだ。

「ケンゴちゃんって男の子、知ってる？」

すると、クリフォードさんの声のトーンがいきなり下がった。

「何かあったのかい？」

「実はそのケンゴちゃん、こつちでは指名手配されてるの。今、目の前にいるんだけど、本人は冤罪だって言うのよ。どう思う？」

「罪状は？」

「洗脳と誘拐。あと、嫌疑で強姦と殺人、さらに黒の外套と繋がっているってとこね」

「多分それ、全部冤罪で間違いないと思うよ」

ありがとう、クリフォードさん、あなたを信じて良かった。

「僕はアルカライムでのことしか知らないけど、彼はこの街の住民を野盗から救ったり、黒の外套による誘拐事件を解決したりしているよ？ それに黒の外套のアジトの場所や抜け道等の情報も隠さず教えてくれたし、連中に関連する貴重な魔道具も提供してくれた。彼と関わった住人——武器商や奴隷商からの評判もかなり良い。悪い噂はアルカライムでは一切ないよ」

「それは嘘ではないのね？」

「僕がカズコちゃんに嘘をつくと思うかい？ 確かに気配がなくて素性^{すじょう}は知れないし、嫌味も言う顔もぼつとしない男だけど、悪い人間じゃないと思うよ。なんだったら、彼の身の潔白^{けつぱく}はこの僕と

アルカライム領主が連名で証明するよ」

一言も二言も多いが、カズミちゃんと揉めたことも隠してくれているし、本当に頼りになる。

「それほどの男なのね？ わかったわ、ありがとう、クリフォードちゃん。また今度一緒に飲みに行きましょう」

「うん、楽しみにしているよ。あと、王都にも黒の外套の抜け道があるらしいから、後で彼に教えてもらおうといいよ」

「ええ、わかったわ、それじゃまたね」

水晶での通信を切り、カズコさんがこちらを振り返った。先ほどまでの剣呑^{けんどん}な雰囲気なくなっている。

クリフォードさんのおかげで交渉がしやすくなった。

「それで……私の嫌疑は、少しは解消されましたか？」

「ええ、黒の外套との繋がりがりや殺人あたりの嫌疑は、もう無視してもいいわね。アルカライムでの情報しかないけど、それでも十分な功績だと思うわ」

ちよつと待て、強姦の嫌疑がなくならないのは何故だ？ エレナ達を連れているからか？
でも俺、そんないやらしい顔をしているかな？ いや、まだ大丈夫、忘れているだけかもしれない